様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２３２９

研究課題名（和文）アメリカ文学と視覚芸術の交差：20世紀中葉の文学と写真

研究課題名（英文）The Intersection of American Literature and Visual Arts: Literature and Photography in the Mid-20th Century

研究代表者
宮澤　直美（Miyazawa, Naomi）

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：５０６３３２８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀前半のアメリカにおける作家作品と写真の関係を検証した。フォトジャーナリズムが流行し、マグナムという報道写真組織が創設された時代において、圧倒的な視覚的インパクトをもつ写真という表現形態に、作家たちはどのような反応を示していたのか。トルーマン・カポーティ、ウラジミール・ナボコフのテクストの精読に加え、米国資料館所蔵の未出版の手記や写真などの一次資料を調査した。無意識を映し出す媒体ともいわれる写真が、現実、幻想、フィクション、メタフィクションといった文学的テーマとどのように関係しているのかを包括的に考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、文学と写真という二つの芸術分野を横断することで、文学解釈の新たな方法を提示しようとする大きなプロジェクトの一環をなす。ニューヨーク公立図書館貴重書所蔵の未出版の一次資料を調査分析し、写真というメディアの持つ同時代的意義、作家に与えた影響を検証したこと、さらに、ヨーロッパの写真論や芸術論をアメリカ文学研究に取り込むことで、独自性の高い作品解釈を提示した。写真、写真論を介在させながら、無意識、現実、幻想、「書く」行為といった文学的テーマにアプローチし、作品の新たな解釈を提示した。そのうち二本の論文はアメリカの学術雑誌に掲載された。

研究成果の概要（英文）：This study examines photography’s integration into American writers’ literary work during the early half of the Twentieth century. How did American writers react to photography’s overwhelming impact as a new form of expression when photojournalism and news photography organizations such as Magnum were founded? I focused on Truman Capote’s and Vladimir Nabokov’s work and studied primary sources such as unpublished memoirs and photographs in the New York Public Library’s Rare Book Collection. This project comprehensively examined how photography, as a medium that reflects the unconscious, relates to literary themes such as reality, illusion, fiction, and metafiction.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学　写真　カポーティ　ナボコフ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、先の科研費研究課題「銀盤写真と 19 世紀前半のアメリカ文学」(26770110)で得た知見をもとに、その研究方法を発展的に乗り越えながら、研究対象とする時代を 19 世紀から 20 世紀へと移して取り組んだ課題である。先の課題では、19 世紀前半のアメリカ文学―エドガー・アラン・ポー、ナサニエル・ホーソーン、ハーマン・メルヴィルーと写真の発明、銀盤写真の登場との関係性を検証した。その研究方法は、写真を「読む」という文学的作業を通じて、アメリカ文学研究に写真という視座を導入し、比較芸術論の可能性を開拓した先駆的研究者アラン・トラクテンバーグ(Alan Trachtenberg)の *Reading American Photographs: Images as History, Mathew Brady to Walker Evans* (New York: Hill and Wang, 1989)の手法を基盤とした。文化史的なアプローチを用いたこの先行研究を出発点とし、より文学的な側面から掘り下げるべく研究を進めた。

この過程で、写真が一般的に普及する 20 世紀になると、文学と写真の共同作業とでも言える相互依存的な関係が構築されていくという点に関心を持った。そこで、20 世紀中葉のアメリカ文学を対象とする新たな研究を計画した。まず、写真と極めて深い関係を持つにもかかわらず、写真という側面からは十分な分析がなされてこなかった作家作品を選定し精読した。同時に、写真と文学の関係に関する研究が進むヨーロッパの芸術論、写真論などの研究を取り込み、新しい研究方法を模索した。その結果、特にヴァルター・ベンヤミンの「無意識」と写真に関する分析を、トルーマン・カポーティの『冷血』に応用する具体的着想を得た。その後、一人目の作家としてカポーティに注目することを決め、本格的に研究を開始した。

２．研究の目的

19 世紀前半を扱った先の研究課題で検証した時代の先にあるものを考察すべく、本課題では 20 世紀中葉のアメリカ文学作品に焦点を当てた。トルーマン・カポーティ、ウラジミール・ナボコフ、ガードルード・スタインなどの作品を、写真という側面から分析し、20 世紀中葉のアメリカ文学と写真が互いに影響し合う様を検証した。写真というメディアの持つ同時代的意義、写真が作家のものの見方や、作風に与えた影響を分析することで、20 世紀中葉のアメリカ文学テクストと写真の関係性を明らかにすることを目指した。同時に、テクスト解釈に写真論や芸術論を介在させ、文学と写真を結びつける領域横断的な視点で、新たな文学解釈の方法を社会に提示することを目指した。本研究は、文学と写真という二つの芸術分野を横断することで、文学解釈の新たな方法を提示しようとする大きなプロジェクトの一環をなすものである。

３．研究の方法

文学テクストや研究書の精読に加え、ニューヨーク公立図書館貴重書部門やバーグ・コレクションで、作家の未出版の手書き原稿、日記、新聞や雑誌、写真などの一次資料調査を経て、当時の写真と文学を取り巻く言説を調査した。具体的には、2019 年 2 月にニューヨーク公立図書館 Stephen A. Schwarzman Building 貴重書部門でカポーティの未出版の手書き原稿、手紙、写真、カンザスでの調査の際のメモなどを収めた資料を調査した。また、ニューヨーク公立図書館のバーグ・コレクション(Henry W. and Albert A. Berg Collection of English and American Literature)では、ナボコフの手書き資料などにも調査範囲を広げ、貴重な資料を数多く収集した。

同時に、フランスの社会学者・批評家であるジャン・ボードリヤール、ジャック・デリダ、メルロ・ポンティ、ロラン・バルトやスーザン・ソンダク、ヴァルター・ベンヤミンの視覚論、写真論、イメージ論を理論的支柱として作品分析を進めた。

４．研究成果

(1) 2018 年度前半は、トルーマン・カポーティの文学作品と、フォト・ジャーナリズム、写真との関係を中心に研究を行なった。まず、カポーティと写真家アンリ・カルティエ-ブレッソン(Henri Cartier-Bresson)、セシル・ビートン(Cecil Beaton)、リチャード・アヴェドン（Richard Avedon）との関係性や、コラボレーション作品 *Observations*(1959)―アヴェドンの写真にカポーティが文章を添えた作品―を分析し、カポーティの写真に対する関心、態度を整理した。その上で、『冷血』(*In Cold Blood*,1965)における写真の役割を分析した。カポーティは、カンザス州で起こった実際の殺人事件を、幼馴染の作家ハーパー・リーを助手として自ら取材し、『冷血』を執筆した。そして、取材に基づく「事実」と、作家の目を通してそれを語ることが生み出す「創作」が同居するというスタイルを、新たな文学ジャンル、ノンフィクション・ノベル（Nonfiction Novel)と名付けた。ルポタージュ的なこのジャンルは、同時代に台頭したフォトジャーナリズムの文学版とも言える。この新たなジャンルの構想に、写真

はどのような役割を果たしていたのか。作品中に登場する証拠写真、容疑者の写真といった視覚的媒体と、それらを描写するテクスト、容疑者の精神分析結果を記録した言葉を、ヴァルター・ベンヤミンの写真に内在する無意識な目という概念を用いて検証した。この研究の成果は、2019年夏に米国の学術雑誌*Arizona Quarterly*に“Photography, Unconscious Optics, and Observation in Capote's *In Cold Blood*”(*Arizona Quarterly*, vol. 75, no. 2, 2019, pp. 37-54)として掲載された。本論文が、2020年David D. Anderson Award for Outstanding Essay in Midwestern Literary Studiesの最終選考にノミネートされたことも、研究を進める上での大きな励みとなった。この賞は、The Society for the Study of Midwestern Literature (SSML)が、アメリカ中西部文学研究に多大な貢献をした研究論文を評する学術賞である。

(2)ニューヨーク公立図書館バーグ・コレクションでの調査では、カポーティに関する資料だけでなく、ナボコフの手書き資料などにも調査の範囲を広げ、貴重な資料を数多く収集した。構想中の論文の議論を、さらに多角的に深める上でのヒントを多く得ることができた。

(3) 2019年度は、2019年2月の米国調査で得たナボコフの資料分析を進め、二つの論文にまとめる作業を進めた。一つ目の論文は、「ナボコフの『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』におけるプルーストのプリズム」(『京都産業大学論集人文科学系列』第53号 pp.71-83.2020年3月)として発表した。論文の前半では、ナボコフの『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』と、マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』とを比較し、ナボコフがプルースト的プリズムの技法を用いて、様々なテキストや視点を介在させながら、相対的に真のセバスチャン像を浮かび上がらせ、過去を取り戻そうとする様子を整理した。その上で、『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』の結末は、プルースト的な過去への旅路とは大きく乖離する結末へと向かう点を以下のように分析した。『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』の結末は、ロシア語で書く作家V・シーリンから、英語で語る作家ナボコフへという転換点における作者自身のアイデンティティの揺らぎと重なる。世紀転換期のロシア亡命作家セバスチャンの生涯を追う物語は、アメリカで新しい自己を見出し、まだ「何者か」としか呼べない新生作家ウラジーミル・ナボコフを、自分の一部に取り込もうとする作家の葛藤を反映するものと解釈した。

(4) 二つ目の論文は、2021年に発表した“The Blindness of the Writer in Nabokov's Despair”(*Journal of Modern Literature*, vol.45.no.1, 2021)である。本論文では、ジャック・デリダの絵画論を用いて、ナボコフの『絶望』(*Despair*)の異なる四つのテキストを比較分析し、次のことを明らかにした。改訂出版される際に施された修正、余白への書き込みなどから読み取れるものは、「見たものをありのままに書く」という写真的客観性やオリジナル対コピーという対立構造を否定するものであり、むしろデリダの絵画論が提示する「見ることの盲目性」へと向かう姿勢である。

(5) 2021年度は、ナボコフ初の長編作品『メアリー』(Mary)などベルリン時代に書かれた作品に注目し、ナボコフと写真との関連性を考察した。1920年代中葉のニュー・フォトグラフィーの高まり、フォト・ジャーナリズム、ロシア系芸術家たちとの接点を調査し、パスポート写真とアイデンティティ、移民の記憶、現実とイメージ等の観点から作品を分析した。この論文は米国の雑誌に投稿したが、まだ掲載には至っていない。

(6) 2022年度には、人種問題、記憶、ことばの力、うわさを扱ったトルーマン・カポーティの「ルイーズ」の分析を進めた。その結果、移民が住むニューヨークと作品の関係、移民と記憶の関係、のちのポスト・モダニズム作家にとっての記憶と写真の位置づけなどの視点から、本作品を議論することの必要性を認識した。これは、2022年度の計画の二つ目として挙げていた、ジャン・ボードリヤールらの分析を援用しながら、1940年代の短編を中心に、アメリカの消費社会におけるイメージ、メディア、写真と作品との関係を考察する作業、そして三つ目のナボコフの『メアリー』と写真に関する論文の大幅な加筆、修正作業を同時に進めた結果、総合的に到達した結論でもある。そこで、論文にまとめることを急がずに、これまでの研究を、次の新しい研究課題へ発展的に移行させる方針に転換した。これを受けて、ポール・オースター、チャールズ・レズニコフ、スティーヴン・ミルハウザーなどの作品を精読し分析する作業に着手した。多くの資料を読んだ結果、複数のテーマを整理し新たな研究課題としての具体的な問いや研究計画を立てることができた。具体的には、カポーティ、ナボコフにも共通しているテーマ、移民の国アメリカの記憶としての物語の形成という点に主眼を置き、物語としての歴史・記憶の形成に、写真・イメージがどのように関与したのか、現代の作家に至るまで

包括的に検証するというものだ。この新たな研究課題を 2023 年度科研費課題として申請し採択された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Naomi Miyazawa	４．巻 45(1)
２．論文標題 The Blindness of the Writer in Nabokov’s Despair	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of Modern Literature	６．最初と最後の頁 137-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2979/jmodelite.45.1.09	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮澤直美	４．巻 53
２．論文標題 ナボコフの『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』におけるプルーストのプリズム	５．発行年 2020年
３．雑誌名 京都産業大学論集　人文科学系列	６．最初と最後の頁 71-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Naomi Miyazawa	４．巻 75
２．論文標題 Photography, Unconscious Optics, and Observation in Capote’s In Cold Blood	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Arizona Quarterly: A Journal of American Literature, Culture, and Theory	６．最初と最後の頁 37-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1353/arq.2019.0011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関